

学 位 論 文 要 旨

氏 名 渡 邊 政 寿

題 目 The Effect of Extensive Reading in Japanese High School Students
in the Classroom: Focused on the Development of Writing Ability

学位論文要旨（和文2,000字又は英文1,000語程度）

本論文の目的は、日本の高校生の英語での発信力、とりわけ書く力を伸長させるために、教室内多読という手法が有効であるかを明らかにすることである。具体的に英語作文力下位5項目のどの項目に対して読むことが関係するのかを調査し、併せて、多読が作文力に効果をもたらすメカニズムについても探る。また、量的研究のみならず、質的研究を含めた混合研究法を採用することにより、英語作文力が向上した学習者の多読に対する取り組みや、英語を書くことに対する言語面、および心情面での変化についても明らかにする。

第1章では、日本の高校生の英語を書く力が不足している点を指摘し、本研究実施の理由となった問題の所在を述べる。EFL環境、すなわち、英語に触れる機会が教室内だけになりがちである状況における日本人高校生にとって、アウトプットのために必要なインプットの絶対量が不足している事実がある。英語で書く力を伸ばすために、読むことによる十分な量のインプットを確保する手段として、Graded Readersを教材とした英語多読を、英語の授業内において実施することの意義を説明する。

第2章では、先行研究を概観する。作文や読解の定義や認知プロセスを比較検討し、英語多読への理論的背景となる根拠を探る。作文については、両者共に「計画→翻訳→確認」という過程を辿るとする、Hayes (2012) と Zimmermann (2000) の作文の認知プロセスを取り上げる。読解については、Grabe & Stollar (2002)を取り上げ、L1読解力の構成要素は、上位レベル・下位レベルの処理、およびワーキングメモリに分けられ、下位レベルの処理が自動化されることにより、ワーキングメモリの注意資源が節約され、上位レベルの処理に使われることで読解が向上する点を紹介する。読解のプロセスとして、ボトムアップ、トップダウン、相互作用、の3つの処理を提唱しているモデルを紹介する。また、多読の定義や効用を述べ、読解と作文の相補的な関係を論証する事例を紹介する。受容語彙が発表語彙に変化する要因である単語親密度と、頻度の関係を調査した先行研究を概観し、両者とも英単語認知に影響を及ぼすことを確認する。併せて、読解面だけでなく、多読の情意面における効用を述べる先行研究を紹介する。さらに、ESL・EFL環境両方において、多読を通して文法が伸びた事例と、読解を通して

作文力が伸びた事例について概観し、明らかにされた事柄と問題点を整理し、本研究において調査が必要な内容を指摘する。

第3章では、本研究の調査方法について述べる。事前・事後テストに関する予備調査と、本調査の研究課題、参加者、使用教材、手順、データ分析方法について説明する。参加者は、多読実施時においては、多読後に書く活動を実施する群（ERW群）と、多読のみを行う群（ER群）に分けられた。加えて、データ分析時においては、事前テストのスコアに基づき、作文力上位群と下位群に分けて分析した。テストスコアに対しては3要因分散分析および単回帰分析、アンケート項目に対しては因子分析を用い、また、振り返りシートに対してはM-GTAを用いる、混合研究法を採用した。

第4章では、3章で述べた分析方法に基づく結果を報告する。3要因分散分析の結果から、ERW群とER群の間には有意差は認められなかったが、下位群において内容、論理・構成、語彙、言語使用の4項目に有意な伸長が認められた。単回帰分析の結果から、ERW群においては言語使用と読解力、ER群においては語彙と読解力との結びつきが認められた。因子分析からは、「英語・多読好意」「速く正確な読解可能」因子などが抽出された。上位群、下位群共に似通った傾向が見られたが、下位群にのみ「適切な教材と難易度と類推可能による理解度増大」因子が抽出された。M-GTAからは「書くこと」に関して、下位群では多読実施の全期間を通じて「書けない事実」は存在したが、中期になると「成果」と「前向きな姿勢」が出現し、後期にも同様の結果が得られたことが明らかになり、因子分析同様に情意面での効用があることが判明した。

第5章では、結果について理論的背景ならびに参加者のコメントをもとに考察する。本研究では、下位群において多読によって作文力が向上したことが実証された。特に、多くの先行研究で言語使用が向上した結果が出ていることに対し、易しい教材を読むことで速読力が向上し、語彙に使われる注意資源が節約されて文法に向けられたために、その力が伸びることを示唆したと言えるが、これはVanPatten(2004)のinput processingに依拠すると考えられる。情意面においても、下位群では教材が適切であったために、英語学習への抵抗感が減少し、楽しさを感じるようになることから意欲的になり、力が付いていくという、Nuttall(1982)の「読書の好循環」に入ることが明らかになり、教室内多読の効用が証明された。具体的応用としてHayes（2012）とZimmermann（2000）の作文プロセスを基本とし、本研究での情意面での効用を踏まえ、日本人高校生の英語作文プロセスをモデルとして表し、多読による変化を提示する。

第6章では、本研究を総括して結論を述べ、教育的示唆、および限界点と今後の課題を述べる。研究結果より、あえて書くという練習を短時間実施しなくても、教室内多読により英語作文力が向上すること、および情意面において前向きな状態であることが作文力向上に重要であることが明らかになった。